

# 台湾男性との結婚を選択した インドネシア女性

——結婚と行為主体性に関する人類学的試論——

小 池 誠  
徐 幼 恩

## 1 は じ め に

なぜ人はある相手との結婚を決めたのだろうか。既婚者に質問すれば、「愛しているから」や「一緒にいると落ち着くから」という受けの良い理由だけでなく、「経済的に安定した生活を送りたいから」という本音も出てくるかもしれない。本稿では、台湾男性と結婚した4人のインドネシア女性の聞き取り調査に基づいて、国際結婚という選択をした背景について、まず彼女らのライフヒストリーから明らかにしたい。そのうえで、国際結婚という選択をした女性の行為主体性（agency）という複雑でややこしい問題について、人類学の観点から議論を試みたいと考えている。調査地は台湾南部にある高雄市である。インフォーマントは台湾第二の都市に住む結婚移民であり、農村部に住むベトナムなど東南アジア出身の女性とはすこし違った経緯で台湾男性と結婚している。

本稿の構成は以下のとおりである。「1 はじめに」に続いて、2章で

---

キーワード：国際結婚，台湾，インドネシア，行為主体性，文化人類学

は台湾における国際結婚について、その歴史と社会・経済的背景、現状を明らかにしたい。3章では華人女性リー（仮名）の聞き取り調査の結果を取り上げる。4章ではリーとは異なる経緯から結婚に至った3人のインドネシア女性の聞き取り結果を紹介する。最後に5章では、彼女らが語る話から国際結婚に至った経緯を明らかにして、彼女らの選択について議論を試みたい。

本稿は小池誠と徐幼恩による共著論文である。小池が主査として徐の博士学位論文「台湾のアジア花嫁——高雄市における生活適応を中心として」（2013年度桃山学院大学大学院文学研究科提出）を指導する過程で、華人系インドネシア女性の国際結婚について議論を交わし、この共著論文の構想が生まれた。また、小池が高雄市で実施した聞き取り調査（2011～2012年）<sup>1)</sup>では、当時、博士課程に在籍していた徐から、中国語通訳を始めとして、インフォーマントの紹介など、さまざまな協力を得た。この意味で、小池の台湾調査は徐の助けなしでは進めることが不可能であった<sup>2)</sup>。

本稿の執筆担当は以下の通りである。「2 台湾の国際結婚」と「3 台湾男性と結婚したインドネシア人女性」の第1節と第2節を徐が担当している。それ以外の部分は、すべて小池が執筆している。なお、全体の構成および文章表現等の校閲については、筆頭著者である小池が担当している。

## 2 台湾の国際結婚

### 2-1 国際結婚の歴史

1990年代以降、台湾の国際結婚が急増している。そのうち9割以上が台湾人男性と中国・東南アジア出身女性との組み合わせである。同じ漢民族である中国人女性結婚移民は、文化と言語の壁がなく、人数が最も多い。これに対して、東南アジア女性は様々な困難を抱えている。台湾政府の移

## 台湾男性との結婚を選択したインドネシア女性

民女性への支援は大半が東南アジア女性を現地の生活に適応させるための政策ともいえる。

1949年、蒋介石が率いる国民党政権は中国大陆における共産党との内戦に敗れ、台湾に移ってきた。妻を残してきた者、独身で台湾に来た兵士は数多くいた。1987年に台湾の民主化に伴う中国大陆訪問の解禁のもとに、国民党老兵は、中国に滞在した妻子を台湾に連れてきた。いわゆる最初の「兩岸婚姻」（台湾人と中国人の結婚）である。その後、民間の活発な交流と中国に進出した台湾企業の激増とともに、中国籍配偶者の人数も次第に増えてきた。

1970年代中期から、台湾の工業化により、農村女性が都市に流出した結果、客家村<sup>3)</sup>をはじめとする農村に住む男性は深刻な結婚難に陥った。また、結婚適齢期を過ぎた国民党の退役軍人も結婚難に直面していた。台湾に居住する東南アジア出身の華人の紹介で、フィリピン人女性やタイ人女性と見合いをし、結婚した。当時、出稼ぎという名目に騙された多くの女性には、偽装の観光ビザで台湾に来て、男性と結婚させられた。その中には風俗業に売り飛ばされる女性もいた。70年代の結婚移民女性はおもにタイ、フィリピン、マレーシア人女性であった。生活習慣・文化の違い、言葉の壁によって、また農村の力仕事に耐え切れず、逃げ出したケースが多かった。このような事件が頻繁に起きたため、タイ、フィリピン、マレーシア人妻は一時期減少した。80年代に入り、言葉の壁によってアジア人妻が逃げる事件を避けるため、客家語や閩南語が話せるインドネシア華人女性が数多く紹介された。当時、男性がブローカーに結納金を支払えば、ブローカーが用意したアジア人女性と結婚できる。そのため、台湾人男性とアジア人女性との国際結婚は常に売買婚だとみなされていた。80年代の末に、観光ビザで台湾に来させた東南アジア女性の人身売買事件が何件も起きたことから、政府は一時期、東南アジア出身の未婚女性にビザ発給を停止し

た。1986年から1991年の間、台湾企業のタイ、マレーシア、フィリピンへの投資の拡大とともに、タイ、フィリピン人妻がもっとも多くなった。1991年以降、台湾企業のインドネシアへの投資の増加とともに、台湾男性と結婚するインドネシア人女性が一気に増えた。1993年からインドネシア籍配偶者の流入を減少させるために、入国面談は1日10組に制限されるようになった。そこで、仲介業者や台湾人男性はベトナム、カンボジアなどの国へ、花嫁候補を探すようになった。この時期は台湾がベトナムに対する投資を大幅に増大させた時期でもあった。台湾人男性が東南アジア諸国に結婚相手を求める趨勢と台湾が東南アジアへ投資するトレンドは一致している。

## 2-2 国際結婚の要因

台湾社会のジェンダー関係の変化と、長年にわたって存在している性比不均衡に加え、経済発展によって農村男性や都市部とその近郊の中低階層の男性が周辺化された結果、台湾人男性に結婚難をもたらした。

まずジェンダー関係の変化をみてみる。ジェンダー関係の変化には、高揚した女性の自意識、女性の社会進出、道徳観や価値観の変化など様々な要素が関係している。女性の高等教育就学率の上昇とともに、台湾人女性の自意識が高揚した。女性の高学歴化は、社会経済的ステータスの上昇をもたらした。また、近年、道徳観や価値観の変化とともに結婚しない女性に対する社会の批判の目は消えつつある。給料を全部自分で使い、結婚に拘束されない「独身貴族」というライフスタイルが広まっている。結婚観念の変化とともに、晩婚化や未婚化現象はますます加速している。

最後は台湾の経済発展によって周辺化された台湾人男性の問題を考える。こうした台湾人男性のジェンダー意識は時代とともに前進していない。「外国籍花嫁を娶る台湾人男性の生活経験研究」によると、現代の台湾人

### 台湾男性との結婚を選択したインドネシア女性

女性に対する男性の見方は下記の3点だという。(1) 台湾人女性は望みが  
高いし、要求が多い。結婚相手を選択する基準は身長、学歴、給料の面  
での「三高」である。(2) 自主性が高く、意志疎通が困難。結婚後の嫁姑問  
題が予想できる。(3) 伝統的美徳の欠如。「おとなしい、言うことを聞く」、  
「家庭を重視する」という女性の美徳がない [鍾重發 2003: 53]。伝統的  
な家族像が大きく変化したにもかかわらず、古き良き妻を求めている台湾  
人男性がいる。自己主張が強い台湾人女性との自由恋愛と比較すると、む  
しろ「夫の言うことを聞く従順」な女性というイメージがあるアジア人女  
性との国際結婚のほうが安全で確実だと思って、台湾男性は国際結婚を選  
択したのである。

台湾の「外国籍花嫁」現象を資本の国際化による商品化された国際結婚  
だと解釈されることがある。資本主義の発展によって、不公平な経済活動  
が展開され、「中核部」、「半中核部」、「周縁部」という「新国際分業関係」  
がもたらされた。アメリカ、日本、ヨーロッパなどの中核部諸国の多国籍  
資本は市場開発や投資のために、1980年代からマレーシア、タイなどの周  
縁部国家に進出した [夏曉鵬 2002: 161-193]。「周縁部」である東南アジ  
ア出身の女性にとって、国際結婚は本人が母国の貧困を脱出するという目  
的以外に、生家の経済的状況を改善させる生存戦略の一つでもある。台湾  
人男性も国際分業体制のもとで犠牲者として結婚市場で周縁化されたため、  
やむをえず発展途上国の女性との国際結婚を選択したのである。

台湾と東南アジア諸国との間に、ベトナムやインドネシアなどとの国際  
結婚仲介業者システムが形成された。「商品化された台湾・ベトナム国際  
結婚市場（商品化的台越跨国婚姻市場）」[王宏仁・張書銘 2003] という  
論文によると、国を跨る結婚仲介に関する分業体制のネットワークが成立  
していて、台湾側にいる大手仲介業者と個人ブローカー、ベトナム側にい  
る「海外在住の台湾企業経営者」（台商）と台湾仲介業者を代表する台湾

人、華人系である大手ブローカー、ベトナム人個人ブローカーと関連書類を扱う専門代理人など、関係者すべてがそれぞれの役割を果たしている。国際結婚市場はもはや新興産業の一つとなっていて、仲介業者だけではなく、台湾人男性と結婚したベトナム人女性も市場に参入し、姉妹・親戚・友人を夫の親戚や友人、近所に紹介し、個人ブローカーになった。近年国際結婚の仲介に関しては、結婚の商品化や人権などの点から問題視されてきた。2007年に改正された法律では、国際結婚仲介の営業は禁じられ、結婚仲介に関する宣伝も罰金に処せられる。国際結婚現象の減少には政府の厳しい規制が関連している。

国際結婚における当事者にとって、配偶者を選択する際、文化的類似性は重要な役割を果たしている [竹下 2000]。1980年代初期、花嫁候補として客家系華人女性が最優先され、続いて福建省南部から東南アジアに移住した閩南系女性が好まれていた。華人を優先する要因には、客家語ないし閩南語<sup>4)</sup> ができ、「教養」が相対的に高く、肌が白いことが挙げられる。その中で、客家語ないし閩南語の能力は結婚生活において、意志疎通の第一条件である。客家系華人が喋っている客家語と閩南系華人が使っている閩南語は、現在台湾社会で通用している客家語と台湾語とは多少差異が存在しても互いに意思疎通が可能である。このように、台湾とインドネシアとの国際結婚に関して、客家系や福建系華人女性が好まれている理由は文化的類似性だと指摘されている。一方、インドネシア国籍の華人は華人という誇りを持っていて、ジャワ人との結婚を避けて、華人同士の結婚を望んでいる。3章で取り上げるリーと彼女の父親は、まさにこのような思いを抱いている。

## 2-3 統計から見る台湾の国際結婚

台湾における近年の国際結婚の割合、外国籍配偶者の統計から台湾の国

台湾男性との結婚を選択したインドネシア女性

表1 台湾の国際結婚<sup>5)</sup>

| 年別   | 結婚総計    | 台湾人同士<br>結婚 | 国際結婚   |        |        | 割合<br>(%) |
|------|---------|-------------|--------|--------|--------|-----------|
|      |         |             | 合計     | 外国籍配偶者 | 中国籍配偶者 |           |
| 2001 | 170,515 | 124,313     | 46,202 | 19,405 | 26,797 | 27        |
| 2002 | 172,655 | 123,642     | 49,013 | 20,107 | 28,906 | 28        |
| 2003 | 171,483 | 116,367     | 55,116 | 19,643 | 35,473 | 32        |
| 2004 | 131,453 | 100,323     | 31,130 | 20,338 | 10,792 | 23        |
| 2005 | 141,140 | 112,713     | 28,427 | 13,808 | 14,619 | 20        |
| 2006 | 142,669 | 118,739     | 23,930 | 9,524  | 14,406 | 16        |
| 2007 | 135,041 | 110,341     | 24,700 | 9,554  | 15,146 | 18        |
| 2008 | 154,866 | 133,137     | 21,729 | 8,957  | 13,292 | 14        |
| 2009 | 117,099 | 95,185      | 21,914 | 8,620  | 13,294 | 19        |
| 2010 | 138,819 | 117,318     | 21,501 | 8,169  | 13,332 | 15        |
| 2011 | 165,327 | 143,811     | 21,516 | 8,053  | 13,463 | 13        |
| 2012 | 143,384 | 122,784     | 20,600 | 7,887  | 12,713 | 14        |
| 2013 | 147,636 | 128,144     | 19,492 | 7,950  | 11,542 | 13        |
| 2014 | 149,287 | 129,586     | 19,701 | 8,715  | 10,986 | 13        |
| 2015 | 154,346 | 134,358     | 19,988 | 9,533  | 10,455 | 13        |
| 2016 | 147,861 | 127,022     | 20,359 | 10,546 | 9,813  | 14        |

際結婚の現状をみることにする。まず表1「台湾の国際結婚」をみると、2003年にピークを迎え、結婚全体の31%も占めていたことが分かる。大量の結婚移民女性の流入とともに、偽装結婚などの社会問題が頻繁に起きたため、台湾政府は2003年末から中国籍配偶者に対して、入国面談制度および男性の扶養能力の有無を確かめる審査の強化を実施したので、2004年度以降、台湾と中国間の国際結婚の件数が一気に減少した。さらに2004年、外国籍配偶者（中国籍以外の外国人女性）に対する海外面談および男性の扶養能力の有無を確かめる審査を強化したので、東南アジア出身の配偶者も2005年以降かなり減ってきた。

続いて表2「国籍からみる外国籍配偶者の人数」をみる。順番では中国語籍配偶者がもっとも多い。ほかの国と比較すれば、同じ漢民族であり、言葉の壁がないことが最大な理由である。続いて2位はベトナム人女性である。その背景には、台湾とベトナムにおける国際結婚仲介業者の分業体

制と深い関連があるとされる。3位は90年代の国際結婚ブームの先駆けとなったインドネシア人女性である。中国を除くと、台湾の国際結婚のなかで東南アジア諸国との結婚が大多数を占めている。

表2 国籍からみる外国籍配偶者の人数（1987年1月～2017年8月累積数合計）

| 中国      |       | ベトナム   |       | インドネシア |      | タイ    |      | フィリピン |      | カンボジア |      | 日 本   |      | 韓 国   |      | その他    |      | 合計      |
|---------|-------|--------|-------|--------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|--------|------|---------|
| 人数      | %     | 人数     | %     | 人数     | %    | 人数    | %    | 人数    | %    | 人数    | %    | 人数    | %    | 人数    | %    | 人数     | %    | 100     |
| 351,930 | 66.81 | 99,146 | 18.82 | 29,320 | 5.57 | 8,674 | 1.65 | 8,960 | 1.70 | 4,297 | 0.82 | 4,705 | 0.89 | 1,547 | 0.29 | 18,190 | 3.45 | 526,769 |

### 3 台湾男性と結婚したインドネシア人女性

#### 3-1 リーが語る生い立ちと台湾での結婚生活

2008年、筆者（徐）が初めて高雄市三民区の生活適応クラスの授業現場を訪ねた時、隣で座っていたリー（仮名）が流暢な台湾語で私に授業内容を確認してきた。これをきっかけとして、当日の授業は筆者が通訳を担当し、台湾語を使用し、彼女に授業内容を説明した。リーの家は筆者の実家の近くにあるため、よく近所の喫茶店で交流を交わし、食事と買い物もよくしていた。本稿で紹介するデータはおもに筆者が2008年から2010年9月まで、リーを対象にして実施した継続的な聞き取り調査の成果である。聞き取り調査は台湾語で実施した。

リー（1970年生まれ）はインドネシア華人の4世だ。祖父が幼少の頃、曾祖父とともに中国福建省から現在の北スマトラ州の東海岸にあるタンジュンバライ（Tanjungbalai）に移住した。リーもここで生まれた。生後まもなく、リーの父親は都市の方が商売しやすいと考えて、一家で北スマトラ州の州都メダンに移住した。父親は個人商店から始めて、しだいにココナッツや、キャッサバ、米、糖の貿易を行うようになり、最後は会社の取締役を勤めた。6人兄弟姉妹の末子であるリーは可愛がられて、なに不自由なく育てられた。生活は裕福でメダンの私立大学の経営学科を卒業してから、



## 台湾男性との結婚を選択したインドネシア女性

首都ジャカルタの外資系の貿易会社で会計の仕事をしていた。リーは中学1年生の時、友達の誘いで占いに行った。その占い師は「あなたの縁談は海の向こうだ」とリーに語った。当時、リーはこのことをただの占いで、なんの根拠もない話と思って聞き流した。

1998年、当時39才だった現在の夫、張（仮名）と42才のその兄（三男）は、台湾に移住したインドネシア華人の案内でインドネシアに見合いに行った。案内人の航空券と、ホテル代、食事代は兄弟二人がまかかった。彼は専門の結婚仲介業者ではなく、定年後のサイドビジネスとして、インドネシアの人脈を利用し、台湾の知り合いにインドネシアの女性を紹介したりしてした。義理の兄はガソリンスタンドの投資で儲けて、裕福な生活を過ごしている。張は工務店を設立して、月に10万台湾ドル（約40万円）の売り上げがある。二人とも高収入にもかかわらず、低学歴で結婚適齢期を逃したため、深刻な結婚難に直面していた。とくに義理の兄は結婚相手に望みが高く、紹介された相手は20人を超えてしまった。独身である義理の兄は20代女性との結婚願望を持っていた。案内人のインドネシア華人のネットワークで、兄弟二人は数名の女性と顔を合わせたが、なかなか気に入る相手がいなかった。諦めて台湾に帰る日の前夜に、リーはインドネシア華人である友達の誘いで、兄弟二人がいるカラオケ店に来た。そこは正式な見合いということではなく、ほかにも何人ものインドネシアの華人女性が来ていた。リーの夫となる男性は彼女に一目ぼれをして、ただちに自分は嫁さがしにインドネシアに来たと彼女に打ち明けた。翌日、張の兄は予定通り台湾に帰ったが、張は台湾に帰るスケジュールを変更し、滞在を一週間伸ばしインドネシアに残った。張は早速リーの自宅を訪問し、彼女の父親に結婚の話をした。リーはその話を聞いて驚いた。台湾人はみんな交際期間もなく、短期間で結婚相手を決めるのかと張に聞いた。そして、張は台湾の国際結婚ブームの話を彼女の父と彼女に話した。張の強いアプロー

チにより、婚約を交わすという結果になった。もし結婚を前提とする付き合いがうまく行かなかつたら、リーは婚約を破棄しても良いと思って婚約した。これに対して、張は一刻も早くリーと結婚したくて、すぐに結婚ができなくても、せめて婚約ができれば良いと思っていた。張が台湾に帰ってから、二人は国際電話で話をして親交を深めた。リーが話す閩南語と、張が使う台湾語はアクセントが異なるし語彙も多少違い、意思疎通が順調とは言い難い。張は常に電話ではコミュニケーションしにくい。実際に会った方が話しやすいから台湾に遊びに来てほしいと何度もリーを誘った。知り合って1ヶ月後、リーは誘いに応じて、父親とともに14日間の高雄旅行をした。二人のチケット代を始めとする旅行費用はすべて張が負担した。

張と知り合う前に、リーには交際している華人男性がインドネシアにいた。交際して2、3年目頃、その男性は頻繁にナイトクラブに出入りして浮気をした。浮気よりも許せなかったのは違法薬物に手を出したことである。彼と別れて落ち込み、環境を変えようと思っていた。一方、リーの父親は従来から台湾に好感を抱いていて、娘を台湾に嫁がせることには賛成だった。2週間の高雄旅行を通して、父親は張が誠実な男性だと判断して、娘に結婚の話を強く勧めた。張の両親は当時すでに他界していて、心配する舅姑問題も避けられると父親は考えた。

父親の勧め以外、華人排斥という当時の背景も関連している<sup>6)</sup>。リーによると、華人が被害者となっている強盗事件が頻繁に起きたという。リー自身と姉も昼間に路上で強盗にあったことがある。外資系会社に勤めていた時、常に小型三輪タクシー (bajaj) を利用して出勤していた。ある日の朝、彼女が小型三輪タクシーに乗っていた時、運転手が彼女にドライバーを突き付けて、「お金を出せ」と脅した。リーが財布のお金を出そうとしたところ、運転手は彼女の指に着けていた指輪を無理やり外して奪った。その後、リーは財布のお金を全部出して、慌ててタクシーを降りた。周囲

## 台湾男性との結婚を選択したインドネシア女性

に多くの小型三輪タクシーが泊まっていたが、犯人の仲間かもしれないと恐れて、乗らずに一生懸命に逃げ出した。

リーの披露宴は台湾とインドネシア、両国とも有名ホテルで盛大に行われ、当時の様子を録画したビデオも残っている。インドネシアでは、会社の取締役であるリーの父親の仕事関係で、720人を超える招待客が参加した。娘が金銭目当ての外国籍花嫁として差別されることを心配していたリーの父親は「結納金」(聘金)を断った。

リーは福建系華人で、もともと閩南語が流暢であったが、夫が喋っている台湾語のアクセントとは異なり、夫婦のコミュニケーションは円滑とは言えない。しかし、閩南語を全く知らない他の女性結婚移民よりは早く言葉の壁を乗り越えた。ただし、漢字を読めないのがリーの唯一の不便な点である。町中どこでも漢字の看板が立っている台湾社会では自分が外国人のような気がするという。リーは「子供のこと、家のこと、夫の会社のこと、とにかく忙しい。土曜日に生活適応クラスに出ることだけで精一杯だ」と嘆いていた。

### 3-2 結婚移民のネットワーク

女性結婚移民のネットワークの利用に関して、二つのネットワーク圏がある。ひとつは同胞のネットワーク、もうひとつはホスト社会である地域の人々とのネットワークである。一般的に台湾人夫はしばしば東南アジア出身の妻に対して不信感を抱いているとされる。そのため、妻の家庭外の接触到不安を感じ、極端な場合は、それを禁止する夫もいる。その場合、結婚移民はホスト社会におけるネットワークの不足で生活適応に支障を来すことがある。しかし、リーは夫の全面的な支援を受けている。さらに、彼女は流暢な閩南語を話せるため、ただちに地域社会との接点ができた。結婚3年目で定年した義兄との同居が始まり、夫以外の台湾人のネットワー

クも増えてきた。二人の子育てが一段落して以来、リーは生活適応クラスに参加し、夫や台湾人親族以外のネットワークを広げることができ、教会のボランティアと知り合い、地域社会との交流がさらに進行している。

台湾政府は女性結婚移民の生活適応を支援するために、出身国ごとに姉妹会を組織させている。台湾に来てまもない結婚移民にとって、姉妹会は彼女らを支援するもっとも重要な団体である。生活に余裕を持っている一般の結婚移民も同胞との交流を望んで、よく姉妹会のイベントに参加している。ところが、リーが初めて高雄に来た時、上記のように言葉の壁がなく、すぐに地元の生活に慣れている。生活で困っていることがあれば、夫や夫の家族に聞けば、ほぼ解決できる。同胞との情報交換を望んで姉妹会に参加する他の結婚移民とは大きく違っている。リーにとってインドネシア姉妹会に積極的に参加する動機がないのである。

### 3-3 インドネシア側からみたリーの結婚と生き方

共著者（徐）の協力を得て、小池も高雄市で上記のリーと会い、いろいろと話を聞く機会をもてた（2011年1月25日）。上記のリーのライフヒストリーを補足するために、インドネシア語を使った彼女の聞き取りから明らかになったことをいくつか紹介したい。

リーの家族全員が仏教徒であり、メダンの実家では福建語（bahasa Hokkien, 閩南語のこと）を使っていた。スハルト時代（1966～98年）には華語（bahasa Mandarin）を学習することができなかった。華語を学ぼうとしたら、当時は隠れて勉強するしかなかった。

インドネシアではすべてお手伝い（pembantu）が家事をしていた。インドネシアでは一度も料理をしたことがなかった。母親もそうだった。しかし、今は家事（urus rumah tangga）と子どもの世話で忙しい。お手伝いをインドネシアから連れてくるのは無理である。病気の高齢者がいるか、

#### 台湾男性との結婚を選択したインドネシア女性

または夫婦が共稼ぎの場合しか、インドネシア人のお手伝いを雇うことができない。週1回の掃除を人に頼むことはできるが、それは高い。だから今は家事をすべて一人でやっている。また、高齢者の世話で来たインドネシア人に世話以外の仕事をさせると、台湾政府の規則で罰金を払わなくては行けない。

「インドネシアにいる時、怖かった (takut) が、ここは気持ちが安心できる (aman)」とリーは語る。1998年、結婚のための書類をジャカルタで作成している時、スハルト大統領の退陣を求める暴動が起きた。夫はジャカルタのホテルに宿泊していて、ホテルの入口が閉鎖されたので、なぜかと聞いた。正直に話すと怖がると思って、その理由を答えなかった。

夫は、リーに対して「もう故郷に帰ったようなものだ (Sudah pulang ke kampung)」と言ってくる。祖先が中国出身だから、出身地にいるのと同じだという意味である。結婚した当初はまだインドネシアに帰りたかった (Masih pingin ke Indonesia)。「しかし、一年一年と気持ちは変わってきた (Tapi, satu tahun satu tahun, jadi rasanya sudah lain)」。今年 (2011年) の8月に台湾国籍 (KTP Taiwan, 直訳すれば「台湾の身分証明書」)<sup>7)</sup>を取得して、インドネシア国籍を捨てることになる。もっと前に台湾国籍を取得することができたが、気持ちは「後で後で (Nanti, nanti)」と気乗りしなかった。すでに二人も子どもがいるから台湾国籍を欲しいという気持ちになっている。

#### 4 3人のインドネシア女性のケース

上記のリーの聞取りの内容だけから、高雄市在住のインドネシア女性の国際結婚について議論することはできないので、台湾男性と結婚した別の3人のインドネシア女性の聞取り結果を紹介する。聞取り調査は小池がインドネシア語を使って進めた。

4-1 イスラーム教徒のジャワ女性

サリ（仮名）は1975年に東ジャワ州マディウン県（Madiun）の農村部（耕地は十分にあるが、水が不足していて収穫が困難な地域）で生まれたジャワ人である<sup>8)</sup>。両親が裕福でなかったため、結婚した姉が住んでいるマラン（Malang）の中学へ進学した。中学に通いながら、姉の双子の子どもの世話をする日々だった。高校卒業後、マランの旅行代理店で1年間働く。このまま、この仕事を続けていいか、将来のことを考えるようになる。そこで、資金を持っている友達と協力して、安く仕入れた商品を住宅地に住む公務員を相手に注文販売をするという商売を始めた。この商売を6年間続け、十分に儲けた。しかし、この商売の仕方を真似る人が出てきたため、マディウンに戻り、姉とともに日用品を売る小さな店（toko kelontong）を始めた。

当時、イトコ（misan）が台北で移住労働者（TKI=tenaga kerja Indonesia）をしていた。雇主と相性が良い（Majikannya cocok）ので、すでに何年も台北で働いていた。彼女を通して今の夫、楊（仮名）を紹介された。彼は1968年生まれで、高雄で内装工事をしている。学歴は高卒だった。サリはまったく華語を話せず、また彼もインドネシア語を話せなかったが、国際電話で何とか話をするようになった。そのような交際が2年間続いた。2008年の年初に楊（当時40歳）が初めてインドネシアに来て、サリの家族に会った。台北で働いていたイトコもたまたま休暇中でインドネシアに帰っていて通訳の役を果たした。サリは華語のコースに通ったことがないが、本で勉強していた。その時は、まだ結婚は合意されなかった。サリの親も含めて、華語が話せないという言葉の障害、文化と宗教の違いという問題があった。サリはイスラームで、楊は儒教だった。しかし、「互いに助け合い、互いに自覚し、そして互いに相手を受け入れる（Saling membantu, saling menyadari, saling menerima）」という原則で、その問題

を乗り越えることになった。2008年の末、二度目に楊がインドネシアに来て、マディウンでイスラーム式の結婚式 (ahad nikah) を挙げた。サリがブタを食べないなどイスラームの義務 (ibadah) を果たすことを認めるというのが、サリ側の結婚の条件だった。楊は2000台湾ドル (約6000円) を婚資 (mas kawin)<sup>9)</sup> として払った。その後、「夫はイスラームに改宗し、中国式の拝拝を止めた (Suaminya ikut Islam, dan tidak ke pai-pai)」。夫はサリを尊重している。また、きちんと生活費をサリに渡していて (memberi nafkah)、これはムスリムにとって重要な義務である。夫はムスリムとして礼拝 (sholat) をしていないが、きちんと働いているのは義務を果たしていることだとサリは語った。断食明けの大祭 (Idul Fitri) には「夫は喜捨をする (Suaminya bayar zakat)」<sup>10)</sup> し、その時はともにモスクに行く。彼女自身、1日5回の礼拝が無理なのは認めている。

サリのこれまでの人生から明らかなように、仕事をしないのは「気持ち良くない (tidak enak)」ので、台湾に着いてすぐに仕事を探した。高雄で知り合ったインドネシア人の友人 (マルタ、次節で紹介) が海外送金会社で人を探していることを教えてくれた。彼女とは台湾に来てからすぐにインドネシア人妻の団体で知り合い、たまたま家が近くだった。最初マルタが引き受けた仕事をサリがするようになった (調査時点でもう1年4ヵ月働いている)。インドネシア人移住労働者を顧客とする仕事なので、土日が忙しく休みが取れない。そのため、第2、第4日曜に高雄のモスクで開催されている礼拝に参加できなくなった。

雇用主が送金会社の窓口と一緒に来ることがあり、華語も仕事で必要になる。そのため、高雄市が用意している華語講座 (3ヵ月) で勉強した。仕事が忙しくて、まだ合格していない。そのため「台湾籍をまだ取得していない (Belum punya KTP Taiwan)」。漢字を読むのが難しくてストレスを感じ、インドネシアに帰りたくなることがある。台湾での生活で、その

他はストレスをあまり感じることはない。そのため、まだ一人で買物ができなくて、かならず夫と一緒にいる。ただし、市場で野菜を買う程度なら一人でもできる。

夫は長男で二人の弟と一人の妹がいる。兄弟姉妹は遠くに住んでいて、行き来はあまりなく干渉してこない。義父は結婚前に亡くなっているし、また義母は最近亡くなったばかりである。世話をすべき両親がいない。

#### 4-2 スラウェシ出身のキリスト教徒女性

マルタ（仮名）<sup>11)</sup> は1970年に南スラウェシ州の州都マカッサル（Makassar）で生まれたトラジャ<sup>12)</sup> 女性である。父親は小さい時に亡くなった。学歴は高卒である。インドネシアでは働いた経験がない。今の夫、周（仮名）は公務員で、建設プロジェクトの関係でマカッサルに来ていた。労働者にインドネシア語で指示するので、少しはインドネシア語ができた。マルタは仕事上の手伝い（通訳）をしていたインドネシア人の紹介で周と知り合った。知り合って6ヵ月後にこっそりと（Sembunyi-semunyi）結婚した（マルタは19歳）。当時、母親は結婚に同意していなかった。はるか遠くの台湾に娘が行くことを心配していた。周は結婚後、プロジェクトの関係で、ジャワ島のバンドンや、タンゲラン、スラン、そしてスマトラ島のランブンと勤務地を転々とした。彼女はそれに従って移動した。その間、仕事関係の寮にずっと住んでいた。隣近所はすべて台湾人だった。インドネシアにいる間、華語の講座に通わず、夫から習っていた。結婚してから夫は7年もインドネシアで働いた。男の子が1989年に生まれた。その子は、今は陸軍の士官学校に入っている。

マルタは1996年に高雄にきた（26歳）。その後、夫は海外出張のない仕事になっている。夫は6人兄弟姉妹の2番目である。結婚した時に義母は亡くなっていたが、義父はいた。高雄で周は自分の家をもっていた。高雄



## 台湾男性との結婚を選択したインドネシア女性

に移ってから、華語の基礎は習得していたので、あまり問題はなかった。しかし、ここの生活に適應できず (Tidak bisa menyesuaikan diri), さびしさを感じていた (Merasa sepih)。インドネシアでは色々な所に行っても、多くの家族や友達がいるのに、高雄に誰もいないのが耐えられなかった。高雄に来てから4年間一人も友達ができなかった。毎年、子どもの学校が休暇の時に、子どもを連れて2ヶ月もインドネシアに帰っていた。夫は良い人だが、インドネシアに帰りたかった。「結婚したことを悔やみ、なぜ台湾に来たのか (Menyesal. Kenapa sampai di Taiwan?)」とずっと考えていた。台湾に来てから4年間は本当につらかった。プロテスタントだったので、いつも祈っていた。だから離婚はしなかった。子どもが小学校と中学校に通っていた時は専業主婦で、ほとんど外出しなかった。子どもが高校に通うようになって、初めて外出するようになり、台湾に来たインドネシア人の手伝いをするようになった。それまでの生活とまったく違ってきた。今は問題を抱えたインドネシア人を助けることに喜びを見出している。それがキリスト教の教えに叶っていると信じている。もし、インドネシア人の移住労働者で暴力や不払いなどの問題にあったら、自分に電話してくれと言っている。また、警察や法廷でインドネシア語の通訳の仕事をよく頼まれる。だから色々な犯罪に関わったインドネシア女性を知っている。犯罪の嫌疑を受けたインドネシア人だけでなく、家庭内暴力の被害者も多い。

台湾の人から結婚相手としてインドネシア女性を紹介してくれと頼まれても断っている。台湾男性のなかには夫のように良い人もいるし、暴力を振るう人もいるのを知っている (次節で取り上げる華人女性、ソンのケース)。うまく行かない結婚のケースも知っている。だから、自分はインドネシア女性と台湾男性の国際結婚の紹介はしない。同じ理由で、インドネシアに帰った時、台湾男性を紹介してくれという話も断っている。また、

台湾の悪い面を知っているのに、インドネシアの家族や知人を台湾に呼ぶことは絶対にない。台湾はインドネシアと違って個人主義が強いし、友人でもお金を融通することはしない。さらに、第一イトコ (sepupuh pertama) でも家族としての絆 (ikatan) が弱い。

夫はもう退職し、年金生活をしている。仕事がなく家にいるので、仕事などに出かける時、車で送り迎えをしてくれる。夫は一人でバイクで出かけるのは危険だと反対している。今は移民局では週に2日、3時間ずつボランティアとして働いている。1年半ほど海外送金会社で働いたが（上記のサリが後任として勤めている）、同じ仕事をずっと続けると飽きる。つねに「新しい経験を求めている (cari pengalaman)」ので、移民局の仕事をするようになった。

インドネシア人妻を中心とする友好団体であるインドネシア姉妹会（中国語で印尼好姐妹支持聯誼繪，インドネシア語で Organisasi Perkumpulan Sahabat Indonesia）の会長を2年間にわたって務めた。今は年配のインドネシア女性が会長に就任している。会員は80人以上いる。ただし、高雄に住むインドネシア人妻の全員が参加しているわけではない。3ヵ月に1回、例会を開催し、それまでに生まれた人の誕生会をしている（仮に3月の例会なら1月から3月生まれの会員）。この団体は政府と協力している。例会の他に、8月17日のインドネシアの独立記念日にも会員みんなで集まっている。

キリスト教会にも通っている。夫は仏教徒だが、教会に行くことに理解を示している。お互いの宗教に理解を持っている。日曜日の午前中の礼拝は華語の礼拝だが、教会の場を借り、午後にインドネシア人だけが集まってインドネシア語で礼拝することもある。参加者の都合によって毎週開催するという訳ではない。礼拝をマルタ自身がすることもある。

台湾国籍の取得は可能だが、まだインドネシア国籍 (WNI) を捨ててい

ない。インドネシアに帰る時、不便だし、台湾の国籍を持っていなくても、何ら不便はないと考えている。

#### 4-3 キリスト教徒の華人女性

ソン（仮名）は1963年にスマトラ島中部のジャンビ（Jambi）で生まれた華人系インドネシア人である<sup>13)</sup>。小学校以来、首都ジャカルタに住み、ブルイット（Pluit）<sup>14)</sup>に親の自宅がある。彼女の両親はともにビジネスをしている。1998年のジャカルタ騒乱の時（ソン自身は高雄にいた）、両親はインドネシア軍に守られて空港に行き、シンガポールに避難した。17隻の漁船を所有し、エビ漁をしている兄（kakak）もいるし、また、ツバメの巣の商売をしている兄もいる（詳細な家族関係は不明）。アメリカ系企業に勤めていた弟（adik）の秘書をしていた時、友達に連れられて行ったレストランで今の夫と知り合う。彼は嫁さがしに来た友達に付いてジャカルタに来た。そこで一目でソンのことを気に入り、すぐに結婚を申し込んだ。1年間（その間に夫は3回ジャカルタに来た）で手続きを済ませて、正式に結婚した。その後、3年間ジャカルタで暮らした後、高雄に来た。高雄に来てもう18年が経った。息子が1990年に生まれ、高校からアメリカに行き、もう大学生である。ソン自身、アメリカで半年暮らしたことがある。夫はすでに両親を亡くしていた。外では優しい男性だったが、結婚してすぐに夫は彼女に暴力を振るうようになった。しかし、離婚は夫婦間だけでなく、夫の家族（ipar）も絡む長いプロセスを要することなので、まだ別れていない。仕事は何か事件が起きた時のインドネシア人の取り調べなど、通訳として働いている。月、火、金に教会の援助で公園でカラオケ大会<sup>15)</sup>が開催される時、その司会と通訳の仕事をしている。以前は、日曜日に長老派の牧師が台北から来ていたので、知り合いの華人系のインドネシア人妻と一緒に教会に出ていたが、彼女と喧嘩してから、その教会には

行かなくなった。日曜日は家の近くにある台湾人が集まる長老派の教会に行っている。

## 5 国際結婚と行為主体性をめぐる問題

この章では、これまで述べてきた4人のインドネシア女性の聞き取り調査の結果を簡潔に整理したうえで、彼女らがどのようにして台湾男性と結婚することを決めたのか、その選択の問題を行為主体性（agency）の点から考えてみたい。

4人の女性、華人で仏教徒のリー（3章）と、ジャワ人でムスリムのサリ（4-1）、トラジャ人でプロテスタントのマルタ（4-2）、華人でキリスト教徒のソン（4-3）の属性をまず整理してみたい。彼女らは、台湾男性と結婚したインドネシア女性のなかでは、どちらかといえば典型的な例ではなく、少数派に入るものである。表2の統計から明らかなように、インドネシア籍配偶者は中国籍、ベトナム籍に次ぐ、3番目である。また、横田が報告しているような結婚仲介業者を通して台湾男性と結婚したベトナム女性〔横田 2008〕や、同じく仲介業者が介在するインドネシア・西カリマンタン州シンカワン出身の客家系女性の結婚〔横田 2016〕のほうが、台湾男性と東南アジア女性の結婚を論じる上で、より一般的な事例といえるだろう。また、上記の事例では、結婚する女性側に貧困という問題が認められ、結婚移民に対し生家に送金するという役割が期待されている〔横田 2016〕。本稿の4人の事例のなかでは、サリの家族が経済的にはもともと恵まれてないが、後で述べるように貧困脱出のための結婚とはいえない。一方、リーとソンは明らかにインドネシア社会では裕福な階層に属している女性であり、インドネシアと台湾という国家間の経済発展の度合いを除いて結婚する当事者だけを考えると、ハイパーガミー（上位婚）と呼ばれるかどうか疑わしいケースである。

この4人を比較するうえで、宗教は重要な要素である。リーが「仏教徒」と自称しているのは、じっさいには仏教と儒教・道教など中国宗教が混淆したものであり、その点では台湾人の平均的な「仏教徒」とほぼ同様の信仰心といえる。仏教という信仰心がなんらかの社会活動ヘリーを駆り立てるわけではない。それに対し、マルタとソンにとって、キリスト教という信仰が「異国」で暮らす二人にとって欠かすことのできない救い、または拠り所となり、同時に、後で述べるようにインドネシア人移住労働者に対する福祉活動に二人を導くものとなっている。

次に、それぞれの女性からみた、インドネシア社会との距離感や、台湾で数多く働いているインドネシア人移住労働者との同胞意識について考えたい。インドネシア的文脈で彼女らの民族性を考えると、華人系が二人（リーとソン）と、インドネシア土着の民族の総称であるプリブミ（*puribumi*）<sup>16)</sup>が二人（サリとマルタ）である。明らかに母国インドネシアに対してもっとも距離を置いているのがリーである。彼女にとって、インドネシアは恐怖感を呼び起こす国であり、すでにインドネシア国籍を放棄して台湾に帰化することが決まっている。また、インドネシアから働きに来ている介護／家事労働者は、法律上、雇用できるなら雇いたい存在であり、次に述べるマルタやソンが抱いているような労働者に対する同胞意識は、リーの語りからまったく感じられない。これは彼女が華人だからというわけではない。同じく華人のソンは教会の活動を通して、窮状にあるインドネシア人労働者に関わろうとしている。この点はマルタと同様である。彼女は警察や法廷の通訳の仕事から、多様なトラブルに巻き込まれたインドネシア人労働者のことをよく知っていて、キリスト教精神をもって問題を抱えたインドネシア人労働者に手を差し伸べようとしている。さらに、高雄在住のインドネシア人妻の集まりであるインドネシア姉妹会にも積極的に関わり、会長職にも就いたことがある。インドネシア人同胞の世話を

するのが好きな女性である。また、インドネシア国籍を捨てる気がなく、この点で、リーと対照的である。サリは台湾にきてから3年とまだ短いため、母国に対してホームシックを感じることもある。家事と仕事で精一杯な状況であり、とくにイスラーム関係の団体には属していない。

最後に、4人がどのようにして台湾男性との結婚という選択に至ったのかという、もっとも肝心な問題を考えることにしよう。本題に入る前に、より一般的な文脈で結婚という選択についてすこし考えたい。単純化していえば、当事者の主体性が発揮される余地がまったくなく、全面的に親の強制によって子どもが結婚させられる場合を想定できる。その反対の極に、現代日本の「恋愛結婚」を置くことができる。もちろん「恋愛結婚」といっても、じっさいにはその結婚という選択に「恋愛」という感情だけでなく、自身と結婚相手の経済的な現状や将来性、家族への配慮などさまざまな要因が複雑に絡んでいる。結婚する当事者の主体性は、個人を取りまく多様な社会・経済的な状況のなかで形作られるものである<sup>17)</sup>。台湾男性との結婚一般について、その選択を上記のスケールにおいて考えてみると、もちろん「恋愛結婚」といえるのはごく少数であり、強制された結婚でもなく、両極の間のどこかに位置するものであろう。横田 [2016] が報告したシンカワンの客家系女性は、経済的に困窮した実家へ送金するための選択という要因が強い。一方、本稿で取り上げた4人のインドネシア女性のなかでマルタのケースは「恋愛結婚」といえるもので、インドネシアで出会った台湾男性と、親の反対を押し切って自らの意思で結婚を決めた珍しい事例といえる（結婚に至る詳細は不明）。

リーのケースを次に考えてみよう。夫となった張は嫁探しという目的をもってインドネシア・ツアーに参加し、リーと知り合った。このような経緯は、台湾男性の国際結婚の典型例といえるだろう。ただし、個人の仲介者が準備した見合いが不成立に終わり、彼は諦めて帰国する直前、偶然、

カラオケ店で出会ったリーに積極的にアプローチして結婚に至った。二人は短期間で婚約を結んだが、その後、最終的に結婚を決めるまでには、リーとその父親が張が本当に結婚相手にふさわしいかを決める熟慮期間があった。彼の人柄だけでなく、彼の両親がすでに死去していて、義理の親との摩擦や高齢者の介護という面倒な問題を心配しなくてよいという安心感が結婚に踏み切らせた要因の一つである。さらに、1998年のスハルト大統領の退陣をめぐる加熱したインドネシアの政治状況のなかで華人に対する焼き打ちや迫害などの事件が頻発していたという時代背景も重要である<sup>18)</sup>。また、リー自身にとって、付き合っていた華人男性が引き起こした浮気とトラブルも関係し、さらに強盗に襲われたことがトラウマになり、もはや危険なインドネシア社会に住みたくないという強い思いも要因となっている。このような複数の要因が絡まって、最終的にリーは張との結婚を決意したと考えられる。

サリの場合は、リーよりも長く、3年間にもわたる熟慮と交渉の期間が必要だった。その間、サリとその父親は、イスラームの教義をめぐって楊と交渉を進めた。リーのケースとは違い、国籍が異なる国際結婚であると同時に宗教も違う越境結婚であることが、サリ側にとって容易に結婚に踏み切れない最大の障害であった。サリがイスラームの教義を守ることが認められ、イスラーム式の結婚式を挙げ、最終的には楊がイスラームに改宗することで宗教問題は決着した。妻側が求めた条件を夫側が全面的に受け入れたことになる。

この二人のケースをみる限り、台湾での結婚生活で想定されるリスクを可能な限り軽減させるように妻側が夫側と交渉を進め、妻側の行為主体性が十分に発揮されたうえで結婚が成立している。結婚移民に関する研究で行為主体性はよく使われる概念である。一例を挙げれば、パイパーとローセスは移住労働者と結婚移民の両方を対象とする論集の序論で、行為主体

性を発揮する一つの形として、セックス・ワークと家事労働から抜け出るための「意識的な戦略として国際結婚を使うこと」を挙げている〔Piper and Roces 2003: 12〕。私見ではこのようなレベルで行為主体性を論じることとは何も言っていないことに等しい。本来は社会的・経済的・文化的な拘束性（一般に「構造」と総称される）のなかでどのように結婚に至るのかという、より深いレベルで主体性を議論するべきであろう。行為主体性（agency）と構造（structure）との関係は、人類学だけでなく社会学でもブルデューやギデンズなど一流の理論家が解明に努めてきた大きな問題である。この小論でいえることはほとんどない。とはいえ、行為主体性を議論する以上は、選択に至る具体的な経緯をていねいにみていくことが大切だといえる。

個人差や程度の差はあるが、国際結婚でも同国人同士の結婚でも、結婚という選択に踏み切る時には何らかの行為主体性が発揮されるという点では共通している。国際結婚のみで主体性を議論するのは明らかに間違いである。ただし、国内の結婚と比べて、国際結婚の方がその選択から期待できる利得が大きく、それと同時にその結婚がもたらすリスクもはるかに大きい。また、国際結婚では結婚相手が国外の人間であるため、地域社会内の結婚よりも、ローカルな慣習などの拘束から脱することが容易である。だからこそ、研究者の立場からすると、国際結婚のほうが当事者の主体性が見えやすく、そして把握しやすいということは確かである。

#### 注

- 1) 台湾における小池の調査は、科学研究費補助金（基盤研究（B）一般）「東南アジアにおける人の移動と帰還移民の再統合に関する社会人類学的研究」（2010～2012年度）によるものである。調査の機会を与えていただいた研究代表者、伊藤眞教授（首都大学東京）に感謝の意を表したい。
- 2) インフォーマントとして台湾調査に協力していただいた方々に、本名を挙



## 台湾男性との結婚を選択したインドネシア女性

げることにはできないが、この場を借りて感謝の気持ちを述べたい。

- 3) 清朝の時代、客家人は福建系本省人より遅く台湾に移住したため、開墾が進んでいなかった内陸部に居住している。大多数の福建系本省人に比較すると、客家人は相対的に弱い立場に置かれ、経済的に恵まれていない。そのため、アジア花嫁ブームは客家系の農村から始まった。しかも、客家村のなかでもっとも貧しい台湾中部の客家村から始まった [夏曉鵬 2002: 45]。
- 4) 台湾の4大エスニック・グループである客家人は客家語、福佬人は閩南語、外省人は中国語（北京話）を使用している（もう一つは先住民）。なお台湾で通用する閩南語は、日本統治時代を経て中国福建省南部で使われている閩南語とは異なる独自の変化を遂げ、近年は台湾語と呼ばれることがある。
- 5) 内政統計通報2017年20週により作成。 <http://sowf.moi.gov.tw/stat/week/list.htm> (2017.9.15参照)
- 6) 1998年5月にジャカルタでは華人に対する暴動が起きて、多くの華人が殺害された。従来、インドネシアの経済は数少ない華人のグループに握られてきたので、インドネシアでは華人に対して友好的ではない。
- 7) 台湾で結婚したインドネシア女性は、「台湾の身分証明書 (KTP Taiwan)」という表現をしばしば用いる。このケースでは、国籍取得を意味しているが、場面によっては、永住権取得を意味することがある。
- 8) 2011年1月25日に共著者（徐）の紹介で会い、聞き取り調査を実施した。
- 9) イスラーム式の結婚式では、夫側が妻側に婚資を払うのが義務付けられている。
- 10) 喜捨 (zakat) は、礼拝・断食などとともにムスリムに義務付けられている五行の一つである。
- 11) 2011年1月27日に共著者（徐）の紹介で会い、聞き取り調査を実施した。
- 12) トラジャ (Toraja) は、スラウェシ島山地部に居住する民族。宗教はプロテスタントが多い。
- 13) 2012年2月27日に共著者（徐）の紹介で会い、聞き取り調査を実施した。時間に制約があったので、実家と婚家の家族関係など詳細は聴いていない。なお、この女性は聞き取りの3年後、2015年に癌のため死去した。ご冥福を祈りたい。
- 14) プリットは北ジャカルタに位置し、華人系インドネシア人が多く住む地

域である。

- 15) 長老派教会が主催しているカラオケ大会。目的は、台湾の高齢者と、その介護をしているインドネシア人介護労働者との交流を図ることである。中国語の曲とインドネシア語の曲、さらに年寄り向けの日本語の曲も歌われる(2012年2月29日に長老派教会の関係者から聞く)。
- 16) 「チナ」と「プリプミ」という分類はインドネシア社会において陰に陽に、また社会的・経済的に重要な分類となっている[津田 2011: 130-131参照]。
- 17) 堀江は女性の越境移動に関する研究動向をまとめた論文[堀江 2017]のなかで、「女性の行為主体性(エージェンシー)」に関する従来の研究を批判的に取り上げていて、その議論の方向性は妥当であると考ええる。また、その論文で紹介されている石井の次のような主張に筆者は賛成する。「“純粋な恋愛”による結婚が、“金目当ての結婚”より“純粋”で“本来の”形だという定義づけ自体が、極めて近代西欧的な画一的な“建前”ではないだろうか」[石井 2005: 406]。この二本の論考は、5章の議論をまとめるうえで参考となっている。
- 18) チェンが聞き取りした西カリマンタン州ポンティアナック生まれの華人女性も、台湾男性と結婚した理由として1998年の反華人暴動を挙げている[Cheng 2014: 143-145]。

## 参考文献

### 日本語文献

- 石井香世子, 2005, 「再生産労働力としての国境を越えた人の移動——既存研究のまとめ」 *NUCB Journal of Economics and Information Science*, 49-2: 397-409
- 竹下修子, 2000, 『国際結婚の社会学』学文社
- 津田浩司, 2011, 『「華人性」の民族誌——体制転換期インドネシアの地方都市のフィールドから』世界思想社
- 堀江未央, 2017, 「[研究動向] 女性の越境移動研究の展開」『社会人類学年報』43: 145-163
- 横田祥子, 2008, 「グローバル・ハイパガミー? ——台湾に嫁いだベトナム人女性の事例から」『異文化コミュニケーション研究』20: 79-110

台湾男性との結婚を選択したインドネシア女性

———, 2016, 「インドネシア華人女性の国際結婚を通じた世帯保持——西カリマンタン州シンカワン市の事例から」『華僑華人研究』13: 27-44

中国語文献

王宏仁・張書銘, 2003, 「商品化的台越跨國婚姻市場」『台灣社會學』6: 177-221

夏曉鵬, 2002, 『流離尋岸——資本國際化下的「外籍新娘」現象』台灣社会研究

鐘重發, 2003, 「台灣男性擇娶外籍配偶之生活經驗研究」嘉義大學家庭教育研究所碩士論文

英語論文

Cheng, I., 2014, Home-going or Home-making? The Citizenship Legislation and Chinese Identity of Indonesian-Chinese Women in Taiwan, in Chiu K., D. Fell and Lin P. (eds.), *Migration to and from Taiwan*, Abingdon: Routledge.

Piper, N. and M. Roces, 2003, Introduction: Marriage and Migration in an Age of Globalization, in Piper, N. and M. Roces (eds.), *Wife or Worker?: Asian Women and Migration*, Lanham: Rowan & Littlefield Publishers.

# **Indonesian Women Who Decided to Marry Taiwanese Men: Anthropological Study on Marriage and Agency**

KOIKE Makoto  
HSU Yuen

This is a paper jointly written by KOIKE and HSU. The aim is to analyze the life histories told by four Indonesian women who married Taiwanese men in the city of Kaohsiung, Taiwan, and to discuss how they decided to marry in terms of women's agency. The concept of agency is often used in discussing marriage and labor migrants in Asia. The Indonesian women interviewed by the authors are as follows: an ethnic Chinese Buddhist, Li; a Javanese Muslim, Sari; a Toraja Christian, Martha; and an ethnic Chinese Christian, Sun (all names are pseudonymous).

Li is from a fourth generation Hokkien family and was born in North Sumatra in 1970. She used to speak Hokkien among the family. In 1998 Li met Zhang at a karaoke shop in Jakarta. Guided by an Indonesian marriage broker who moved to Taiwan, Zhang and his brother came to Indonesia to search for a bride. He fell in love with Li at first sight. Shortly after that night, he visited her home and proposed to her. After she and her father visited Kaohsiung, they finally accepted his proposal because they knew that Zhang was a man of good character and that she would not have to look after his elderly relatives since his parents had already passed away. Also, the anti-Chinese riots that erupted in Jakarta in May 1998 made her to decide to leave her native country.

Sari was born in 1975 in a rural area of East Java. Because her family was not well-off, she lodged at her elder sister's house to attend junior and senior

high school. Her cousin, who worked in Taipei, introduced her to Yang who worked in interior finishing in Kaohsiung. Though she could not speak Mandarin and he could not speak Indonesian, they still managed to communicate internationally over the phone. Two years later, he visited Indonesia and proposed to her. But Sari and her family did not accept it because they were afraid of the differences in language, religion and culture. On his second visit, he promised to respect her Islamic obligations (*ibadah*) such as halal food, and finally Sari agreed to his proposal. In her town they held an Islamic marriage ceremony. Finally, he converted to Islam.

Martha was born in Makassar, South Sulawesi in 1970. At the age of 19 she met Zhou, who worked for a Taiwanese construction project in Makassar. Six months later, they got married without the permission of her parents. After their marriage, they had to live in Indonesia for seven years. Then they moved to Kaohsiung in 1996. Martha could not adapt herself to her new circumstances during her first four years in Taiwan. She always felt lonely at home and eager to go back to Indonesia. Because she is a devout Christian, she always prayed to God. However, after her son entered high school, she began to go out and help Indonesian migrant workers who were facing serious problems. She believes that it accords with the teachings of Christianity to give aid to Indonesian workers in trouble.

Sun is an ethnic Chinese who was born in Jambi, Central Sumatra in 1963, and moved to Jakarta with her parents. Her family was well-off and some of them were entrepreneurs. At a restaurant in Jakarta she met her future husband, who had come from Taiwan. He had followed his friends searching for a bride in Indonesia. He fell in love with her at first sight and proposed to her. It took one year to finish the marriage procedures in Jakarta. After getting married, she has suffered from domestic violence from her husband. She has not decided to get divorced yet. She helps Indonesian migrant workers at some events organized by the Presbyterian Church in Kaohsiung.

The case of Martha is similar to an ordinary “love marriage” in Japan. Though the cases of Li and Sari are not “love marriages,” they are not “forced marriages” or “marriages for money,” which are often reported in the

literature on cross-border marriages. Both Li and Sari as well as their parents considered very carefully the risks of marriages with Taiwanese men, and negotiated with the groom's side to meet their requirements. Through the long negotiation, the bride's side expressed their agency fully. Piper and Roces [2003] regard "using international marriage as a conscious strategy" as "another form of expressing agency." This kind of statement is not a convincing argument. In discussing marriage in terms of agency, it is necessary to analyze the process of marriage in more detail.